

芥川龍之介

運



運

目のあらい簾すだれが、入口にぶらさげてあるので、往来
 の容子ようすは仕事場しごとばにいても、よく見えた。清水きよみずへ通う往来
 は、さつきから、人通りが絶えない。金鼓こんくをかけた法師
 が通る。壺装束つぼそうぞくをした女おんなが通る。その後あとからは、めずら
 しく、黄牛あめうしに曳ひかせた網代車あじろぐるまが通った。それが皆、疎まばら
 な蒲かまの簾の目を、右からも左からも、来たかと思うと、
 通りぬけてしまう。その中で変らないのは、午後の日が
 暖あたたかかに春あぶを炙あぶっている、狭い往来の土の色ばかりであ

る。

その人の往来を、仕事場の中から、何と云う事もなく眺めていた、一人の青侍が、この時、ふと思いついたように、主あるじの陶器師すえものつくりへ声をかけた。

「不相変あいかわらず、観音様かんのんへ参詣する人が多いようだね」
「左様でございます」

陶器師は、仕事に気をとられていたせい、少し迷惑そうに、こう答えた。が、これは眼の小さい、鼻の上を向いた、何処どこかひょうきんな所のある老人で、顔つきにも容子にも、悪気らしいものは、微塵みじんもない。着ている

のは、麻の帷子かたびらであろう。それに萎なえた揉もみ烏帽子えぼしをかけたのが、この頃評判の高い鳥羽僧正とばそうじようの絵巻の中の人物を見るようである。

「私も一つ、日参でもして見ようか。こう、うだつが上らなくちゃ、やりきれない」

「御冗談で」

「なに、これで善い運が授かるとなれば、私だって、信心をするよ。日参さんろうをしたって、参籠さんろうをしたって、そうとすれば、安いものだからね。つまり、神仏を相手に、一商売をするようなものさ」

青侍は、年相応な上調子なもの言いをして、下唇したくちびるを舐なめながら、きよろきよろ、仕事場の中を見廻した。
 ——竹藪たけやぶを後うしろにして建てた、藁葺わらぶきのあばら家だから、
 中は鼻がつかえる程狭い。が、簾すだの外の往来が、目まぐるしく動くのに引換えて、此処ここでは、甕かめでも瓶子へいしでも、
 皆赭あかちやけた土器かわらけの肌はだをのどかな春風に吹かせながら、
 百年も昔からそうしていたように、ひっそりかんと静ま
 っている。どうやらこの家の棟むねばかりは、燕つばめさえも巢
 を食わないらしい。……翁おきなが返事をしないので、青侍
 は又語を継いだ。

「お爺さんじいなんぞも、この年までには、随分いろんな事を見たり聞いたりしたろうね。どうだい。観音様は、ほんとうに運を授けて下さるものかね」

「左様でございます。昔は折々、そんな事もあったように聞いておりますが」

「どんな事があったね」

「どんな事と云って、そう一口には申せませんがな。」

——しかし、貴方あなたがたは、そんな話をお聞きなすつても、格別面白くもございません」

「可哀そうに、これでも少しは信心しんじんぎのある男なんだ

ぜ。愈々いよいよ運が授かるとなれば、明日あすにも——」

「信心気でございますかな。商売気でございますかな」

翁は、眦めじりに皺しわをよせて笑った。捏ねこていた土が、壺の形になったので、やっと気が楽になったと云う調子である。

「神仏の御考えなどと申すものは、貴方あなたがた位の御年では、中々わからないものでございますよ」

「それはわからなからうさ。わからないから、お爺さんに聞くんだけだね」

「いやさ、神仏が運をお授けになる、ならないと云う事

じやございませぬ。そのお授けになる運の善し悪しと云う事が」

「だって、授けて貰えもらばわかるじやないか。善い運だとか、悪い運だとか」

「それが、どうも貴方がたには、ちとおわかりになり兼ねましようて」

「私には運の善し悪しより、そう云う理窟りくつの方がわからなそうだね」

日が傾き出したのであろう。さつきから見ると、往来へ落ちる物の影が、心もち長くなった。その長い影をひ

きながら、頭かしらに桶おけをのせた物売りの女が二人、簾の目を横に、通りすぎる。一人は手に宿への土産みやげらしい桜の枝を持っていた。

「今、西の市いちで、績麻うみその麩みせを出している女なぞもそうでございませうが」

「だから、私はさつきから、お爺さんの話を聞きたがつているじゃないか」

二人は、暫しばらくの間、黙った。青侍は、爪で頤あごのひげを抜きながら、ぼんやり往来を眺めている。貝殻のよう
に白く光るのは、大方さつきの桜の花がこぼれたのであ

ろう。

「話さないかね。お爺さん」

やがて、眠そうな声で、青侍が云った。

「では、御免を蒙まごむつて、一つ御話し申しませうか。

又、何時いつもの昔話でございませうが」

こう前置きをして、陶器師の翁は、徐おもむろに話し出した。

日の長い短いも知らない人でなくては、話せないような、悠ゆうちよう長な口ぶりで話し出したのである。

「もうかれこれ三四十年前まえになりました。あの女がまだ娘の時分に、この清水の観音様へ、願がんをかけた事がご

ございました。どうぞ一生安楽に暮せますようにと申しましてな。何しろ、その時分は、あの女もたった一人のおふくろに死別しにわかれた後で、それこそ日々にちにちの暮しにも差支さしつかえるような身の上でございましたから、そう云う願をかけたのも、満更無理はございません。

「死んだおふくろと申すのは、もと白朱社はくしゆしやの巫子みこで、一しきりは大そう流行はやったものでございますが、狐きつねを使うと云う噂うわさを立てられてからは、めつきり人も来なくなってしまうたようでございます。これが又、白あばたの、年に似合わず水々しい、大がらな婆さんでございま

してな、何さま、あの容子じや、狐どころか男でも……」

「おふくろの話よりは、その娘の話の方を伺いたいね」

「いや、これは御挨拶で。——そのおふくろが死んだの

で、後は娘一人の瘦せ腕でございますから、いくらかせ

いでも、暮くらしの立てられようがございませぬ。そこで、

あの容貌きりようのよい、利発者の娘が、お籠こもりをするにも、檻つづれ

故に、あたりへ気がひけると云う始末でございました」

「へえ。そんなに好いい女だったかい」

「左様でございます。気だてと云い、顔と云い、手前の
欲目では、先まづどこへ出しても、恥しくないと思いました

がな」

「惜しい事に、昔さね」

青侍は、色のさめた藍あいの水干そでの袖口を、ちよいとひつぱりながら、こんな事を云う。翁は、笑声を鼻から抜いて、又ゆっくり話しつづけた。後の竹藪しきりでは、頻うぐいすに鶯うぐいすが啼ないている。

「それが、三七日さんしちにちの間、御籠りをして、今日が満願と云う夜よに、ふと夢を見ました。何でも、同じ御堂まいに詣まいっていた連中の中に、背むしの坊主が一人いて、そいつが何か陀羅尼だらにのようなものを、くどくど誦ずしていたそうでご

ざいます。大方それが、気になったせいでございましたよ。うとうと眠気がさして来ても、その声ばかりは、どうしても耳をはなれませぬ。とんと、縁の下で蚯蚓みみずでも鳴いているような心もちで——すると、その声が、何時いつの間にもやら人間の語ことばになつて、『ここから歸る路みちで、そなたに云いよる男がある。その男の云う事を聞くがよい』と、こう聞えると申すのでございますな。

「はつと思つて、眼がさめると、坊主はやっぱり陀羅尼だらに三昧さんまいでございます。が、何と云っているのだから、いくら耳を澄まして、わかりませぬ。その時、何気なく、ひ

よいと向うを見ると、常夜燈のぼんやりした明りで、観音様の御顔が見えました。日頃拝みなれた、端巖たんごんみみょう微妙の御顔でございませうが、それを見ると、不思議にも又耳もとで、『その男の云う事を聞くがよい』と、誰だか云うような気がしたそうでございませう。そこで、娘はそれを観音様の御告おつげだと、一いち図ちずに思いこんでしまいましたげな」

「はてね」

「さて、夜がふけてから、御寺を出て、だらだら下りの坂路さかみちを、五条へくだらうとしますと、案の定うしろ後から、男が一人抱きつきました。丁度、春さきの暖い晩でござ

いましたが、生憎あいにくの暗やみで、相手の男の顔も見えなければ、着ている物などは、猶なおの事わかりませぬ。唯ただ、ふり離そうとする拍子に、手が向うの口髭くちひげにさわりました。いやはや、とんだ時が、満願の夜に当たったものでございませぬ。「その上、相手は、名を訊きかれても、名を申しませぬ。所を訊かれても、所を申しませぬ。維、云う事を聞けと云うばかりで、坂下の路を北へ北へ、抱きすくめたまま、引きずるようにして、つれて行きます。泣こうにも、喚わめこうにも、まるで人通りのない時分なのだから、仕方がございませぬ」

「ははあ、それから」

「それから、とうとう八坂寺やさかでらの塔の中へ、つれこまれて、その晩は其処そこですごしたそうでごさいます。——いや、その辺の事なら、何も年よりの手前などが、わざわざざ申し上げるまでもございますまい」

翁は、又眦めじりに皺をよせて、笑った。往来の影は、愈々いよいよ長くなったらしい。吹くともなく渡る風のせいであろう、其処ここ此処ここに散っている桜の花も、何時の間にかこっちへ吹きよせられて、今では、雨落ちの石の間に、点々と白い色をこぼしている。

「冗談云つちやいけない」

青侍は、思い出したように、あご頤のひげを抜き抜き、こ
う云つた。

「それで、もうおしまいかい」

「それだけなら、何もわざわざお話し申すがものはござ
いませぬ」翁は、やはり壺をいじりながら、「夜があけ
ると、その男が、こうなるのも大方宿世すくせの縁だろうから、
とてもの事に夫婦めおとになつてくれと申したそうでございま
す」

「成程」

「夢の御告げでもないならともかく、娘は、観音様のお
ぼしめし思召し通りになるのだと思つたものでございますから、
 とうとう首かぶりをたて豎たてにふりました。さて形かたばかりのさかずきごと盃事
 をすませると、先ます、当座の用にと云つて、塔の奥から出
 して来てくれたのが綾あやを十疋びきに絹あなを十疋あなでございます。
 ——この真ま似ねばかりは、いくら貴方あなたにもちとむずかしい
 かも存じませんな」

青侍は、にやにや笑うばかりで、返事をしない。鶯も、
 もう啼かなくなつた。

「やがて、男は、日の暮に帰ると云つて、娘一人を留守

居に、あわただ慌しく何処かへ出て参りました。その後の淋さびしさは、また一倍でございます。いくら利発者でも、こうなると、さすがに心細くなるのでございましょう。そこで、心晴らしに、何気なく塔の奥へ行つて見ると、どうでございましょう。綾や絹は愚おろかな事、珠玉とか砂金とか云う金目かねめの物が、皮匣かわごに幾つともなく、並べてあると云うじゃございませぬか。これにはああ云う気丈な娘でも、思わず肚胸とむねをついたそうでございます。

「物にもよりますが、こんな財物たからを持っているからは、もう疑うたがいはございませぬ。引剥ひはぎでなければ、物盗ものどりでご

ございます。——そう思うと、今までは維、さびしいだけだったのが、急に、怖いのも手伝って、何だか片時もこうしては、いられないような気になりました。何さま、悪く放免の手にでもかかろうものなら、どんな目に遭^あうかも知れませぬ。

「そこで、逃げ場をさがす気で、急いで戸口の方へ引返そうと致しますと、誰だか、皮匣の後から、しわがれた声で呼びとめました。何しろ、人はいないとばかり思っていた所でございますから、驚いたの驚かないのじゃございませぬ。見ると、人間とも海鼠^{なまこ}ともつかないような

ものが、砂金の袋を積んだ中に、まる円くなって、坐って居ります。——これが目くされの、皺だらけの、腰のまがった、背の低い、六十ばかりの尼法師でございました。しかも娘の思惑をおもわく知ってか知らないでか、膝で前へのり出しながら、見かけによらない猫撫声で、初対面の挨拶あいさつをするのでございます。

「こっちは、それどころの騒ぎではないのでございますが、何しろ逃げようと云う巧みをけどられなどしては大変だと思つたので、しぶしぶ皮匣の上に肘をつきながら、心にもない世間話をはじめました。どうも話の容子では、

この婆さんが、今まであの男の炊女みずしが何かつとめていたらしいのでございます。が、男の商売の事になると、妙に一口も話しませぬ。それさえ、娘の方では、気になるのに、その尼が又、少し耳が遠いと来ているものでございますから、一つ話を何度となく、云い直したり聞き直したりするので、こっちはもう泣き出したいほど、気がじれます。――

「そんな事が、かれこれ午ひるまでつづいたでございましたよ。すると、やれ清水の桜が咲いたの、やれ五条の橋普請が出来たのと云っている中に、幸さいわい、年の加減か、こ

の婆さんが、そろそろ居睡りをはじめました。一つは娘の返答が、はかばかしくなかつたせいもあるのでございましょう。そこで、娘は、折を計つて、相手の寢息を窺うかがいながら、そつと入口まで這はつて行つて、戸を細目にあけて見ました。外にも、いい案配に、人のけはいはございませぬ。――

「此処でそのまま、逃げ出してしまえば、何事もなかつたのでございますが、ふと今朝けさ貰もらつた綾と絹との事を思い出したので、それを取りに、又そつと皮匣の所まで歸つて参りました。すると、どうした拍子か、砂金の袋に

けつまずいて、思わず手が婆さんの膝にさわったから、
たまりませぬ。尼の奴め驚いて眼をさますと、しばらく暫は唯、
あつけにとられて、いたようでございますが、急に気ち
がいのようになって、娘の足にかじりつきました。そう
して、半分泣き声で、早口に何かしやべり立てます。切
れ切れに、ことば語が耳へはいる所では、万一娘に逃げられ
たら、自分がどんなひどい目に遇あうかも知れないと、こ
う云っているらしいのでございますな。が、こっちも此
処にいては命にかかると云う時でございますから、元
よりそんな事に耳をかす訳がございませぬ。そこで、と

うとう、女同志のつかみ合がはじまりました。

「打つ。蹴^ける。砂金の袋をなげつける。——梁^{はり}に巢を食った鼠^{ねずみ}も、落ちそうな騒ぎでございます。それに、こ
うなると、死物狂いだけに、婆さんの力も、莫^ば迦^かには出
来ませぬ。が、そこは年のちがいでございましょう。間
もなく、娘が、綾と絹とを小脇^{こわき}にかかえて、息を切らし
ながら、塔の戸口をこっそり、忍び出た時には、尼はも
う、口もきかないようになっておりました。これは、後
で聞いたのでございますが、死骸^{しがい}は、鼻から血を少し出
して、頭から砂金を浴びせられたまま、薄暗い隅^{すみ}の方に、

仰向けになつて、臥ねていたそうでございます。

「こつちは八坂寺を出ると、町家の多い所は、さすがに気がさしたと見えて、五条京極きょうごく辺の知人しりびとの家をたずねました。この知人と云うのも、その日暮しの貧乏人なのでございますが、絹の一疋もやったからでございますよ、湯を沸かすやら、粥かゆを煮るやら、いろいろ経営してくれたそうでございます。そこで、娘も漸ようやく、ほっと一息つく事が出来ました」

「私も、やっと安心したよ」

青侍は、帯にはさんでいた扇おうちをぬいて、簾の外の夕

目を眺めながら、それを器用に、ぱちつかせた。その夕日の中を、今しがた白丁はくちようが五六人、騒々しく笑い興じながら、通りすぎたが、影はまだ往来に残っている。

「じゃそれで愈々けりがついたと云う訳だね」

「ところが」翁は大仰に首を振って、「その知人の家に居りますと、急に往来の人通りがはげしくなつて、あれを見い、あれを見いと、罵ののしり合う声が聞えます。何しろうしろぐら後暗いからだ体ですから、娘は又、胸を痛めました。あの物盗りが仕返しししにでも来たものか、さもなければ、

検非違使の追手がかかりでもしたもののか、——そう思うともう、おちおち、粥かゆを啜すすつてもおられませぬ」

「成程」

「そこで、戸の隙間すきまから、そつと外を覗のぞいて見ると、見物の男女なんによの中を、放免が五六人、それに看督長かどのおさが一人ついで、物々しげに通りました。それからその連中にかこまれて、縄にかかった男が一人、所々裂けた水干を着て烏帽子えぼしもかぶらず、曳ひかれて参ります。どうも物盗りを捕えて、これからその住家すみかへ、実録をしに行く所らしいのでございますな。

「しかも、その物盗りと云うのが、昨夜、ゆうべ五条の坂で云いよつた、あの男だそうじゃございませぬか。娘はそれを見ると、何故か、涙がこみ上げて来たそうでございませぬ。これは、当人が、手前に話しました——何も、その男に惚ほれていたの、どうしたのと云う訳じゃない。が、その縄目をうけた姿を見たら、急に自分で、自分がいじらしくなつて、思わず泣いてしまったと、まあこう云うのでございませぬ。まことにその話を聞いた時には、手前もつくづくそう思いましたよ——」

「何とね」

「観音様へ願をかけるのも考え物だとな」

「だが、お爺さん。その女は、それから、どうにかやっ
て行けるようになったのだろう」

「どうにかどころか、今では何不自由ない身の上になっ
ております。その綾や絹を売ったのを本もとに致しましてな。
観音様も、これだけは、御約束をおちがえになりません」
「それなら、そのくらいな目に遇っても、結構じゃない
か」

外の日の光は、何時の間にか、黄いろく夕づいた。そ
の中を、風だった竹籥の音が、かすかながら其処此処か

ら聞えて来る。往来の人通りも、暫くはとだえたらしい。

「人を殺したって、物盗りの女房になつたって、する気でしたんでなければ仕方がないやね」

青侍は、扇を帯へさしながら、立上った。翁も、もう提ひさげの水で、泥にまみれた手を洗っている——二人とも、どうやら、暮れてゆく春の日と、相手の心もちとに、物足りない何かを、感じてでもいるような容子である。

「とにかく、その女は仕合せ者だよ」

「御冗談で」

「まったくさ。お爺さんも、そう思うだろう」

「手前でございますか。手前なら、そう云う運はまっぴらでございますな」

「へええ、そうかね。私なら、二つ返事で、授けて頂くがね」

「じゃ観音様を、御信心なさいまし」

「そうそう、明日あすから私も、お籠こもりでもしようよ」

日本文学電子図書館

羅生門・鼻

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社
昭和43年7月20日発行



日本文学電子図書館